

万葉集入門

北川 和 秀

1. 万葉集とは

- ① 奈良時代後半に編纂された、わが国現存最古の和歌集。
- ② 全部で四五〇〇首あまりの和歌を収める。全二十巻。
- ③ 編者は不明。ただし、大伴家持が深く関わったことは間違いない。
- ④ 歌の作歌年代は、飛鳥時代から奈良時代中期までの一二〇年間ほど。これを四期に分ける。
- ⑤ 歌の作者は、天皇、貴族から一般庶民まで幅広い。
- ⑥ 作者の出身地は近畿地方が多いが、東歌や防人歌など東国農民の歌も収められている。
- ⑦ 歌によまれた地域は大和国（今の奈良県）を初めとする近畿地方が多いが、全国に及ぶ。作者の関係で、九州北部や越中国（今の富山県及び石川県の一部）も多い。
- ⑧ 全二十巻が一度に成ったのではなく、平城遷都からほど遠からぬ頃に飛鳥時代の部分が編纂され、以後、増補が繰り返されて、現在見る形になったと考えられる。
- ⑨ 歌は、基本的に、雑歌、相聞、挽歌という三つの分類のもとに配列されている。この分類を部立（ぶだて）という。
- ⑩ 相聞は恋の歌、挽歌は死にまつわる歌、雑歌はその他。ただし、初期万葉の頃の雑歌は宮廷の儀礼歌など公的な歌が多い。時代が降ると雑歌には様々な歌が増えてゆく。
- ⑪ 当時はまだひらがなもカタカナも発明されていなかったため、歌は漢字のみで表記されている。このため、現代では読み方の確定しない歌もある。
- ⑫ 表記に当たっては、「春」^{はる}「山」^{やま}「恋」^{こひ}などのように、漢字の意味を生かした用法と、「波流」^{はる}「也麻」^{やま}「古非」^{こひ}などのように、漢字の発音（音または訓）だけを借りた用法とがある。漢字の発音だけを借りた用字を万葉仮名という。
- ⑬ 万葉集の原本は今に伝わらないが、部分的ながらも平安時代の写本（桂本など）が数点伝来している。全巻揃った写本は鎌倉時代後期のもの（西本願寺本）が最も古い。
- ⑭ 平安時代になると、漢字のみで書かれた万葉集は読むことが難しくなっていたので、村上天皇が天曆五年（九五二）に、宮中の梨壺に和歌所を置いて、五人の人たち（梨壺の五人）に、万葉集の訓を付けさせた。これが万葉集研究のはじめといえる。
- ⑮ 鎌倉時代中期の僧仙覚は万葉集の写本を多数集めて本文校訂を行い、注釈書も著した。江戸時代になると、契沖・賀茂真淵などの国学者たちによって、研究が進んだ。
- ⑯ 明治時代に『国歌大観』が編纂されたときに、万葉集の全ての歌に番号がつけられた。その番号が今でも「万葉集の歌番号」として用いられている。

2. 万葉集の名義（書名の由来）

○諸説あり、確定していない。

○「万」は「多くの」、「集」は「集めた書」ということであろうから、ポイントは「葉」の解釈ということになる。

○諸説の中で次の二説が有力。

①「葉」を「言の葉」と解し、多くの言葉＝多くの歌とする説（仙覚など）

*山上憶良の『類聚歌林』という書物がある。この書名においては、歌が林に例えられている。歌を林に例えることがあるのならば、歌を葉に例えてもおかしくない。

*『古今和歌集』以降は書名に「和歌」を含むが、『万葉集』の場合は『万葉和歌集』とは言わない。とすれば、「葉」に「和歌」の意味が含まれているのではないか。

②「葉」を「時代」と解し、末永く伝われという願いを込めたとする説（契沖など）

*漢籍には「葉」を「世」「代」の意に用いた例がある。

*『古事記』序文にも「天皇詔りたまひしく、『……帝紀を撰しるび録し、旧辞を討たづね竅きはめ、偽いつはりを削り実を定めて、後葉つたに流つたへむと欲おもふ』とのりたまひき」という一節がある。

※諸説の中では②の説が有力だが、「多くの歌を集め、それが万代の後までも伝わるようにとの願いを込めた書」というような折衷的な考え方も可能かもしれない。

3. 題詞・序文・歌

①歌の前に題詞の付いている作品は多い。

柿本朝臣人麻呂の歌一首

↑題詞

・淡海あふみの海夕波千鳥な汝が鳴けば情こころもしのに古いにしへ思おもほゆ（三・二六六）

↑歌

②題詞と歌との間に漢文の序のある歌もある（ただし、序文のある作品はほぼ巻五に限定。他巻では大伴家持などの作にわずかにある程度）

子等を思ふ歌一首 序を并あはせたり

↑題詞

←序

釈迦如来い、金口こんくに正に説きたまはく、等しく衆生を思ふこと、羅睺羅らごらの如しとのたまへり。又説きたまはく、愛は子に過ぎたりといふこと無しとのたまへり。至極の大聖すら尚し子を愛うつくしむる心あり。況いはむや世間よのなかの蒼生あをひとの、誰かは子を愛うつくしびずあらめや。

・瓜食はめば 子ども思ほゆ 栗食めば まして俵しぬはゆ 何処いづより 来りしものそ 眼交まなかひに
もとな懸かりて 安眠やすし寝なさぬ（五・八〇二）

↑歌（長歌）

反歌

・銀しろかねも金くがねも玉も何せむに勝まれる宝子たからこに及しかめやも（八〇三）

↑歌（反歌）

*元号「令和」は巻五の梅花宴の歌の序から

4. 各期の特徴

| 代表歌人 | 歌の特徴 | 時代的背景 | 期間 | |
|---|--|--|---------------------|-----|
| 舒明天皇 有間皇子 天智天皇 額田王 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 古代歌謡から和歌へ ・ 口承的、呪的性 ・ 格、集団性 ・ 歌体が五七の定型に落ちつく ・ 格調高い歌が多い | <ul style="list-style-type: none"> ・ 蘇我氏の時代から、大化改新を経て中大兄の時代へ ・ 白村江の大敗、大津京遷都もあり、激動の時代 | 舒明天皇 壬申の乱 672 | 第一期 |
| 柿本人麻呂 高市黒人 持統天皇 大津皇子 大伯皇女 志貴皇子 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 口承から記載へ ・ 専門歌人が出現 ・ 題材が拡大 ・ 長歌が著しく発展 ・ 定型化が進む | <ul style="list-style-type: none"> ・ 壬申の乱後の安定した時代 ・ 天武天皇のもと強力な中央集権の国家が作られた | 壬申の乱 平城遷都 710 | 第二期 |
| 大伴旅人 山上憶良 山部赤人 笠金村 高橋虫麻呂 大伴坂上郎女 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 個性が開花した時代 ・ 歌人層が飛躍的に拡大し、歌のテーマも多様化 ・ 漢詩文や仏典の影響が見られる歌もある | <ul style="list-style-type: none"> ・ 律令制が確立する時代 ・ 記紀が成立し、風土記撰進の詔が出るなど、文化的な事業も活発であった | 平城遷都 天平五年 733 頃 | 第三期 |
| 大伴家持 笠郎女 狭野弟上娘子 中臣宅守 田辺福麻呂 遣新羅使人たち | <ul style="list-style-type: none"> ・ 長歌は衰退し、類型的になる ・ 歌が社交の道具ともなる ・ 繊細優美、理知的 ・ 技巧的な歌が増える | <ul style="list-style-type: none"> ・ 天平文化の花開いた時代 ・ 律令制は早くもほころびを見せ始める | 天平五年頃 天平宝字二年 759 | 第四期 |

*磐姫皇后（巻二巻頭歌）や雄略天皇（巻一卷頭歌）などは第一期には含まない。
*他に、東歌・防人歌

5. 主な万葉歌

- ① 熟田津に船乗りせむと月待てば潮もかなひぬ今は漕ぎ出でな（一・八）額田王12
- ② あかねさす紫野行き標野行き野守は見ずや君が袖振る（一・二〇）額田王10
- ③ 紫草のほへる妹を憎くあらば人妻ゆゑにわれ恋ひめやも（一・二二）天武天皇17
- ④ ささなみの志賀の辛崎幸くあれど大宮人の船待ちかねつ（一・三〇）柿本人麻呂16
- ⑤ 東の野に炎の立つ見えてかへり見すれば月傾きぬ（一・四八）柿本人麻呂6
- ⑥ 淡海の海夕波千鳥汝が鳴けば情ものしに古思ほゆ（三・二六六）柿本人麻呂9
- ⑦ 天地の分れし時ゆ 神さびて 高く貴き 駿河なる 布士の高嶺を 天の原 振り放せ
見れば 渡る日の 影も隠らひ 照る月の 光も見えず 白雲も 行きはばかり 時じ
くそ 雪は降りける 語り継ぎ 言ひ継ぎ行かむ 不尽の高嶺は（三・三一七）

山部赤人3

- ⑧ 田児の浦ゆうち出でて見れば真白にそ不尽の高嶺に雪は降りける（三・三一八）

山部赤人1

- ⑨ あをによし寧楽の京師は咲く花の薫ふがごとく今盛りなり（三・三二八）小野老20

- ⑩ 憶良らは今は罷らむ子泣くらむそを負ふ母も吾を待つらむそ（三・三三七）山上憶良11

- ⑪ 瓜食めば 子ども思ほゆ 栗食めば まして憇はゆ 何処より 来りしものそ 眼交に

- ⑫ 銀も金も玉も何せむに勝れる宝子に及かめやも（五・八〇三）山上憶良2

- ⑬ 若の浦に潮満ち来れば瀉を無み葦辺をさして鶴鳴き渡る（六・九一九）山部赤人13

- ⑭ み吉野の象山の木末にはここだもさわく鳥の声かも（六・九二四）山部赤人19

- ⑮ ぬばたまの夜の更けゆけば久木生ふる清き川原に千鳥しば鳴く（六・九二五）山部赤人15

- ⑯ 石ばしる垂水の上のさ蕨の萌え出づる春になりけるかも（八・一四一八）志貴皇子5

- ⑰ 多摩川に曝す手作さらさら何そこの児のここだ愛しき（一四・三三七四）

- 武蔵国東歌14

大伴家持8

- ⑱ 春の野に霞たなびきうら悲しこの夕かげに鶯鳴くも（一九・四二九〇）大伴家持18

- ⑲ わが屋戸のいささ群竹吹く風の音のかそけきこの夕かも（一九・四二九一）大伴家持7

- ⑳ うらうらに照れる春日に雲雀あがり情悲しも独りしおもへば（一九・四二九二）

- 大伴家持8

*各種の万葉集解説書、万葉かるた、旧制中学校・高等女学校教科書、新制高等学校教科書などに採られている万葉歌を集計し、そのベスト二〇を歌番号順に排列した。末尾の算用数字は順位。

山部赤人5首、柿本人麻呂3首、山上憶良3首、大伴家持3首、額田王2首

6. 百人一首と万葉集

① 秋の田のかりほの庵の苫をあらみわが衣手は露にぬれつつ（天智天皇）
秋の田のかりほのいほのとまをあらみわが衣手はつゆにぬれつつ（後撰集 302）

天智天皇御製

秋田刈る仮廬を作りわが居れば衣手寒く露そ置きにける（万葉集一〇・二一七四）
作者不明

② 春過ぎて夏来にけらし白妙の衣干すてふ天の香具山（持統天皇）
はるすぎて夏きにけらし白妙の衣ほすてふ天のかぐ山（新古今集 175）持統天皇御製
春過ぎて夏来たるらし白櫛の衣干したり天香具山（万葉集一・二八）持統天皇
春過而 夏来良之 白妙能 衣乾有 天之香来山（同・原文）

③ あしびきの山鳥の尾のしだり尾のながし夜をひとりかも寝む（柿本人麻呂）
葦引の山鳥の尾のしだりをのながし夜をひとりかもねむ（拾遺集 778）人まろ
あしひきの山鳥の尾のしだり尾の長々し夜をひとりかも寝む（万葉集一一・二八〇二）
或本歌）作者不明

④ 田子の浦にうち出でて見れば白妙の富士の高嶺に雪は降りつつ（山部赤人）
たこのうらにうち出でてみれば白妙の富士のたかねに雪はふりつつ（新古今集 675）赤人
田子の浦ゆうち出でて見れば真白にぞ富士の高嶺に雪は降りける（万葉集三・三一八）
山部赤人

田児之浦従 打出而見者 真白衣 不尽能高嶺尔 雪波零家留（同・原文）

⑤ 奥山に紅葉踏みわけ鳴く鹿の声きく時ぞ秋は悲しき（猿丸大夫）
おく山に紅葉ふみわけなく鹿のこゑきく時ぞ秋は悲しき（古今集 215）よみ人しらず

⑥ かささぎの渡せる橋におく霜の白きをみれば夜ぞふけにける（中納言家持）
かささぎのわたせる橋におくしものしろきをみれば夜ぞふけにける（新古今集 620）

中納言家持

かささぎのわたせるはしにおくしものしろきをみればよはふけにけり（家持集 268）

⑦ 天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも（安倍仲麻呂）
あまの原ふりさけ見ればかすがなるみかさの山にいでし月かも（古今集 406）安倍仲麿

7. 群馬県内の万葉歌碑

【江戸時代のもの2基+1】

① 佐野の舟橋の碑

上毛野佐野の舟橋取り放し親は離くれど吾は離るがへ（一四・三四二〇）

文政十年（一八二七）現在の高崎市新町（あらまち）延養寺の良翁が建てたもの

② 沢渡神社境内の万葉歌碑

左和多里の手児にい行き逢ひ赤駒が足掻きを速み言問はず来ぬ（一四・三五四〇）

《参考》

○（文政十一年八月十二日）君ノ尾よりもなほ谷川にそひて一里あまり出れば、伊香保より直に草津へかよふ道にいづ。板橋をわたり右にたどりて沢渡の出湯にいづ。四万より四里半とぞいふなる。こゝにもゆあみする人つどへり。伊香保より草津へのゆきかひにはかならずやどる所なれば、夜はわきてにぎはへり。薬師のみ堂にまうでゝ見れば、万葉集なる

左和多里能手児伊由伎安比安可故麻我

安我伎乎波夜美許等登波受伎奴

と云歌を石にゑりて立たり。こゝと定たるはたしかなる證ありてにや。

（富田永世『上毛温泉廻』文政十一年九月一日成）1828

ここに記されている歌碑がそれとすれば、この歌碑は文政十一年（一八二八）にはすでに建っていたことになる。

③ 前橋市紅雲町の巖島神社境内の柿本人麻呂歌碑

おくやまのいしがきぬまのみづこもりにこひやわたらむあふよしをなみ

《参考》

○西に見ゆる天台宗寿延寺は、赤城大明神の御別当所にて御祭礼の節は登山して御代泰平民安全の御祈祷あり。同村土産（ウブスナ）は柿本人麿の古墳にや五輪あり。後に石に刻して人麿の古歌あり。

奥山の石垣沼の水こもりに恋や渡らんあふよしをなみ

（奈良光龍『赤城詣』天保十二年十二月成）1841

ここに記されている歌碑がそれとすれば、この歌碑は天保十二年（一八四一）にはすでに建っていたことになる。ただし、この歌碑は万葉歌碑ではない。

*おく山のいはかきぬまのみづこもりにこひや渡らんあふよしをなみ（拾遺集六六一）人まる

*青山の石垣沼の水隠りに恋ひや渡らむ逢ふ縁をなみ（一一・二七〇七）作者不明

*青山之 石垣沼間乃 水隠尔 恋哉奥将度 相縁乎無（同・原文）

※他に、山名丘陵の「石碑の路」、旧伊香保町の九基の万葉歌碑など県内に多数